

はじめに

本論文集は、2009年から現在までおこなってきた日本語の文章・談話単位での表現研究をまとめたものである。

第1章から第6章は、ジャンルとしての日本語の文章・談話表現を捉えるための理論的背景を探った論文を集めている。日本語教育や日本語学は現在、大きな転換期に入ったと考えられる。その背景には日本語学の課題も存在する。現在、日本語教育で使われている日本語に関する文法概念の流れには、大きく国語史的視点の延長でソシユールのラングの側面から研究を進めてきた橋本文法などの国文法由来の文法的品詞分類による分類体系、それに接続する形で欧米の言語研究由来の観点を導入した日本語学で使用されている様々な概念、そして日本語教育の必要性から生まれて来た「複合辞」「基本文型」などの日本語教育での文法的概念があり、こうした異質な立場の混淆現象がもたらしている日本語研究および教育上の説明内容の混乱や困難については、台湾の日本語教育の現場でも周知の事実と言えよう。

本論文集では、第1章、第2章で近年、活発化している文法概念や品詞の見直しに関わる議論の概略を踏まえながら、問題提起として、今までのラング中心の文法概念を、研究史的に具体的テキストに即した表現主体の表現活動のパロール的視点から見直す試みをおこなっている。パロールの問題は、社会的な表現ジャンルでの言語のプラグマティクス（運用）に関する問題であり、以降の章では具体的な言語のプラグマティクスについて、具体的な表現を元に、考察をおこなっている。プラグマティクス（運用）

は、今までの言語研究では語用論と訳されてきたが、単語や句などの用法の問題に止まらず、こうした表現が具体的に使用されている社会的なジャンルでの具体的言語運用の特徴を捉えることが社会的にも要請されている。社会的ジャンルでの言語のプラグマティクスから見ると、現在の日本語研究のもっとも基本的な問題のひとつは、言語単位設定の課題である。第3章では、文法的単位について、従来の説をまとめた上で、ジャンルのある具体的な言語表現において、文法的な単位はどのように機能しているのかを整理した。近年、活発化している文法概念や品詞の見直しに関わる議論の概略を踏まえながら、問題提起として、今までのラング中心の文法概念を、具体的テキストに即した表現主体の表現活動のパロール的視点から見直した。

続く第4章では、態(ヴォイス)に関する文法カテゴリーを再構成する意味で、現在、忘れられた態として再提起されている中動態の概念を検討し、事例研究として実際に社会的ジャンルを持った文章として、動作主と被動作主の関係が明確で、しかも態に関する多様な表現が使われている小説を取り上げて、態に関わる語彙と文型の実態を考察することにした。具体的なジャンルのある表現を見ることで、態に関わる文法カテゴリーを見直すための基本的条件を提示し、より簡明化された文法カテゴリーの日本語教育への応用可能性を探っている。

第5章では、文章における基本的な表現単位を考察した。現在の日本語学、日本語教育では言語をラングとして、具体的な使用場面やジャンルから切り離して考察するのが前提になっている。しかし、言語の運用や創造

のためには具体的な使用場面や社会的ジャンルにおいて機能している言語表現を考察する必要がある。その先駆者と言えるミハイル・バフチンの提起した、言語考察の原理として具体的な社会的ジャンルを持って生み出されたテキストの対話性を提起した。バフチンの対話性を手がかりにして、社会的ジャンルにおけるテキストの事例として、類例が非常に多く見られ現代でも用いられている文章構成の型を持つ近代小説の文章構成とそこで使用される言語形式の特徴を考察した。具体的ジャンルを持ったテキストからは、言語形式と用法の規則性ばかりではなく、そのテキストの対話的機能を見出すことができ、それが日本語教育などへの応用の道を開くと考えられる。

談話研究でも、近年、談話の基本単位を巡る議論が盛んになっているが、実は日本で談話研究が本格的に始まった1960年代にこうした議論は活発に行われており、再び研究が原点に回帰したとも言える。様々な研究視点と方法が談話研究で発展してきたが、基本的な考察は、言語表現あるいは、そこに観察される非言語行動に限定されており、ある具体的な表現主体が社会的に遂行している談話の基本的成立条件は研究のテーマには上っていない。そこで、第6章では、具体的表現主体が談話を遂行する前提条件として、場所、役割および目的という三つの談話成立の要素を今までの談話研究の成果から帰納し、ドラマの談話資料によって具体的条件の特徴を考察した。場所、役割および目的という三つの談話成立の要素を想定することで、日本語教育においても、学習者が言語表現をただ発話するのではなく、参与の場所、役割、目的に応じて談話に参与する必要性を明らかにし

た。

第7章から第10章は、具体的な表現ジャンルの中の文章・談話レベルの表現のプラグマティクスについて、考察をおこなっている。まず第7章では、談話の具体的な運用として日本語では大きな意味を持つ待遇の表現について、ポライトネスの問題を取り上げた。ポライトネスは、今までの考察では、丁寧さ、敬意を示す機能に注目してきたが、本章では、逆のケースに注目し、相手との関係が難しい場面を選んで「アンチ・ポライトネス」の場面での談話のストラテジーに関してドラマ・シナリオを元に考察した。その結果、相手との関係を断つなど、コミュニケーションが困難な場面にも一定のストラテジーが成立しており、極めて規則的な言語のプラグマティクスが見出された。プラグマティクスは、表現意図と場面において極めて具体的に機能していることが分かる。

第8章では、日本語教育における教材論の視点を踏まえ、今まで教育現場でも、またテキスト研究でも比較的焦点化されることが少なかった、メディア・テキストのビジュアル要素の機能について、印刷メディアを代表する新聞を作業仮説呈示のためのサンプルに取り上げ、『朝日新聞』の記事のデータをもとに、分析の枠組み造りを試みた。分析の結果、新聞紙面のビジュアル要素は形式から7種に分けられ、その機能には大きく、読者の関心を惹く「強調」、報道対象を讃える「顕彰」、報道内容を分かりやすく伝える「説明」という3つがあることが分かった。具体的ジャンルを持った表現では、言語非言語の表現はマルチモーダル表現として、不可分に結びついており、プラグマティクスには具体的な表現意図と機能が存在して

いる。日本語教育でメディアの素材を利用する場合は、その特性を事前によく理解し、その限界を知った上で、教材化することが不可欠と言える。

さらに第9章では、日本語教育の読解教材に扱われる論説ジャンルの文章例として社説を取り上げて、その表現の特徴を引用の面から考察した。従来、日本語学での引用は構文上、文法上の形式からの検討が中心であった。本章では、具体的なジャンルを持つテキストに関する事例研究として社説を対象として選び、そのジャンルを決める「報道性」の点から引用表現の分析をおこなった。その結果、社説の引用表現には、文法論的引用で検討されてきた直接(有標)引用と同時に、ジャンル特徴と言える「報道性」によって文法論的引用とは違うレベルで生まれる無標引用があり、新聞テキストでの重要表現となっている。サンプル調査ではあるが、新聞の社説には「報道性」によって生まれる引用表現が多用され、しかもそれはテキストの社会的ジャンル特性を規定する性格を帯びていることが分かった。新聞の引用表現の特徴は、従来の文法論では引用とは見なしえない無標引用表現が多出している点にある。そして、同時に文法論的有標引用と結合されて、無標引用がテキストでの表現意図の伝達構造上、重要な機能を持って各新聞社で用いられていると考えられる。

最後に第10章では、様々な説明や説得の場面での言語活動に関わる表現のプラグマティクスの一端について、事例研究の方法により、インターネットで公開されている就職対策サイトに出ている、就職用の自己PR文、エントリーシートの説明、就職動機説明などの就職活動で説明が求められる基本的内容について説得心理学の観点を注目点に用いながら、テキスト

論の方法で分析した。こうした実用的ジャンルの文章・談話は今まで言語研究や教育研究ではそれほど重視されていなかったが、分析の結果、現在の日本の就職活動で用いられる文章は、かなり同質性の高い一定の型が決まっており、結論、成果、発見または成果強調、希望、評価という文章構成をとって、説得心理学的な重要ポイントとして、読み手に対して書き手の信頼を確立することとメリットを強調することが基本として求められることが分かった。習得した日本語を効果的に使用するスキルは日本語学習者にとって、卒業後の場面では特に、激化する様々な競争の中で重要であり、そうした幅広い社会的場面における表現研究がプラグマティクスの解明に必要である事例を示した。

本論文集の編集は、以下のようにおこなっている。

- (1) 引用した資料に付いている下線や記号等は、論者に拠るものである。
- (2) 論文集中の図、表の作成は、元の資料を整理したもので、論者に拠るものである。
- (3) 各章ごとに、扱っているジャンルの文章・談話の種類が異なり、また、発表期間も約10年に及んでいるため、扱っている資料や文献の種類が大きく異なっている。そこで、本書全体での参考文献や資料の一覧は作らず、各章の終わりにテキスト、参考文献、資料の一覧を設けた。
- (4) 本論文集所収の論文は、シンポジウムでの発表を元に雑誌等に投稿して、審査を受けたものである。発表時期は注記の形で各章の終わりに示している。また、発表した雑誌の書誌は、本書の末に初出一覧を設けている。

第1章 日本語学を支える言語思想の限界

—現在の言語研究の制約を超えて—

1. 日本語学の基本的課題としての品詞論

日本語教育や日本語学は現在、大きな転換期に入ったと考えられる。その背景には日本語学の大きな課題が存在する。現在、日本語教育で使われている日本語に関する文法概念の流れには、大きく三つの潮流が存在している。まず、現在の日本語教育と日本語研究に見られる品詞概念の起源のひとつは、国語史的な視点の延長として、言語活動の場面と主体を捨象してソシユールのラングの側面から研究を進めてきた橋本文法などの国文法に由来する文法的品詞分類による分類体系である。それに接続する形で、欧米の言語研究由来のラングの観点を導入した日本語学で使用されている様々な文法概念が並行的に使用されている。三つ目は、国文法とは異なる日本語教育の現場の必要性から生まれて来た「複合辞」「基本文型」などの日本語教育での文法的概念である。こうした異質な概念の混淆現象をもたらしている日本語研究および教育上の説明内容の混乱や困難については、台湾の日本語教育の現場でも周知の事実と言えよう。

本論文では、こうした全体的動きに注目しながら、その中で特に、成熟の段階に入ったと言われている日本語学の各領域(文法、語彙)の研究の最も基礎となる「言語観」と「文法的単位」の問題について焦点を当てて見たい。